慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	新資料・漱石『文学論』講義の序論「外国語研究の困難について」： 森巻吉受講ノートからの影印・翻刻・翻訳と解題
Sub Title	
Author	服部, 徹也(Hattori, Tetsuya) 樋口, 武志(Higuchi, Takeshi)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2017
Jtitle	三田國文 No.62 (2017. 12) ,p.24(21)- 44(1)
JaLC DOI	10.14991/002.20171200-0044
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20171200-0044

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新資料・漱石『文学論』講義の序論「外国語研究の困難について」

――森巻吉受講ノートからの影印・翻刻・翻訳と解題――

服部徹也・樋口武志

はじめに

本稿は東京大学総合文化研究科・教養学部駒場博物館所蔵の森巻吉筆記による、夏目漱石（本名金之助）の東京帝国大学講義の受講ノート『GENERAL CONCEPTION OF LITERATURE』（以下「森ノート」と呼ぶ）の冒頭に記された序論、“On the Dif亞 of the Study of a Foreign Language. (An Introductory Remark.)”（外国語研究の困難について（序論）、以下「序論」と呼ぶ）の紹介を行うものである。夏目金之助の講義に序論が存在していたことは従来知られておらず、帰朝後初めて大学の教壇で話した内容を伝える資料と考えられる。貴重な資料の撮影・掲載をお許し頂いた同館に御礼申し上げる。

以下、第１節に解題を付し、第２節に資料の影印・翻刻を、第３節に資料の日本語訳を収録した。共著者の分担は次の通り。解題は服部が執筆した。翻刻は服部が行い、樋口による修訂を経た。翻訳は樋口が行った。

１．解　題

夏目漱石は英国留学から帰国後、東京帝国大学で英文学科講師として教鞭を執った。その講義の受講ノートが複数現存していることについては既に紹介を行った。(1) 森ノートの序論が英語筆記されていることに関係すると思われるため、まずは森巻吉の人となりについて確認しておく。

森巻吉は1877年５月３日、福井生まれである。岐阜尋常中学校、大阪高等英学校、東京専門学校、郁文館中学校、第四高等学校を経て1901年９月に東京帝国大学文科大学英文学科に入学。同学年に厨川白村（本名辰夫）がいる。同じく四高出身の後輩金子健二が1903年５月５日付の日記に書き留めたところによれば、着任当初の漱石は授業で「語尾を呑むくせありて筆記し難し森氏其まねをなし衆を笑はす」という。(2) 森はのちに漱石宅に出入りし、「馬奇」という雅号を授かるなど長きに亘って親交を深めることになる。

父親は岐阜聖公会訓盲院の創設（1894年）で知られる森巻耳（けんじ）で、同院の新校舎建設に際し漱石の呼びかけで東京・虎ノ門にて建築費募集のための慈善演芸会が催され話題を集めた。[3] 森巻吉は父親譲りの高い英語力を持っていたとされ、[4] 帝大卒業（1904年７月）後は英語教員として一高嘱託講師ほかを歴任、1922年から翌年にかけて英語英文学および語学教授法研究のためイギリス、ドイツ、アメリカへ留学。のちに一高の名物校長（1929～1937年）として知られるようになる。[5] 1939年７月12日、胃癌により死去。

続いて漱石の「文学論」講義（General Conception of Literature）について確認する。「文学論」講義は２部構成である。第１部「形式論」は、1903年４月20日[6]の初授業から５月26日までの１ヶ月間であり、予告していた内容の半ばで中断された。第２部「内容論」は、同年９月21日すなわち新学年の初授業から1905年６月６日[7]まで丸々２年度に亘り、のちに修正を経て『文学論』（大倉書店、1907）として刊行されるに至る。

「森ノート」の記録範囲、すなわち森巻吉が受講したのは「形式論」及び、「内容論」の第１学年度分（1903年４月20日～1904年５月30日[8]、内容は『文学論』第４編第２章の終わる直前までに相当）である。今回取り上げる「序論」はその内容からいって、「形式論」に対する序論というよりも、「文学論」講義全体に対するものと考えるのがふさわしい。[9]「形式論」を記録した受講ノートは、森ノートの他に若月保治（山口大学図書館若月紫蘭文庫蔵）、岸重次（金沢大学附属図書館岸文庫蔵）、金子健二（金子三郎編『記録東京帝大一学生の聴講ノート』［リーブ企画、2002］）のノートが現存する。また漱石の没後、皆川正禧が自身と学友のノート、計４名分を用いて編纂し講義録『英文学形式論』（岩波書店、1924）を刊行した（その際に用いたノートはいずれも所在不明）。

「形式論」講義の本論冒頭は、文学という言葉がいかに曖昧で定義しがたいものであるかを述べることから始まっている。漱石の小説『三四郎』（『朝日新聞』1908・９～12）の以下のワンシーンに、これとそっくりの講義が描かれている。

> 其次には文学論の講義に出た。此先生は教室に這入つて、一寸黒板（ちょいとボールド）を眺めてゐたが、黒板（ボールド）の上に書いてある、Geschehen（ゲシェーヘン）と云ふ字と Nachbild（ナハビルド）と云ふ字を見て、はあ独乙語かと云つて、笑ひながらさつさと消して仕舞つた。三四郎は之が為めに独乙語に対する敬意を少し失つた様に感じた。先生は、それから古来文学者が文学に対して下した定義を凡そ二十許り列（なら）べた。三四郎は是も大事に手帳に筆記して置いた。
>
> （『三四郎』、３章、下線引用者）

この文学の定義について述べるところから、若月と金子のノート、及び『英文学形式論』は始まっている（いずれも序論はない）。これに対し、「序論」全体を記録しているのは森ノートのみであり、岸ノートは「形式論」の前に１ページだけ断片的な筆記が行われており、注意深く検討すると森ノートの序論に通じる文言が見受けられる。このことから森ノートに存在する序論は、森が独自に付したものではなく、漱石が「形式論」

講義に先だって述べた内容を書き取ったものだと推定できる（別稿[10]で詳しく論証したため、ここでは繰り返さない）。

森ノートは「序論」全８ページおよび「形式論」冒頭の11ページの計19ページが英語で筆記されている。それ以後は日本語筆記に術語と引用文として英語を鏤める文体が「内容論」の受講終了箇所まで続いている。若月・岸・金子の受講ノート及び『英文学形式論』が日本語で記録している「形式論」の冒頭を、森ノートだけが英語で筆記していることから明らかなように、英語筆記は森独自の行為である。速記法創案で知られる中根正親に日本語による講義を英語で筆記した逸話が残っているが、森の場合もそれを試みたのではあるまいか。

「序論」の内容は外国文学研究者としての心構えを非ネイティヴ読者であることに立脚して説くものであり、他国の文学を学ぶのは盲従的な（＝奴隷的な）模倣（servile imitation）のためではなく、内心の独創性のためだと説く点は、後年に定式化して語る「自己本位」（「私の個人主義」）の原型ともいえるだろう。「序論」の論旨は従来知られる漱石の学問的立場を逸脱するものではなく、むしろその基底部を直截に述べたものと評価できる。たとえば自身の立場を “as a fellow ― struggler in the transition waves of our national progress” といささか大仰にも響くほど広い視野において表現した言葉には、英国留学中に研究構想を記した「大要」というノートに一脈通ずるものがある。

⑴　世界を如何に観るべき
⑵　人生と世界との関係如何。人生は世界と関係なきか。関係あるか。関係あらば其関係如何。
⑶　世界と人世との見解より人世の目的を論ず
⑷　吾人人類の目的は皆同一なるか。人類と他の動物との目的は皆同一なるか
⑸　同一ならば衝突を免かれざるか。衝突を免かれずんば如何なる状況に於て又如何なる時期に於て如何なる方法を以て此調和をはかるか
⑹　現在の世は此調和を得つゝあるか
⑺　調和を得ずとすれば吾人の目的は此調和に近づく為に其方向に進歩せざる可らず
⑻　日本人民は人類の一国代表者として此調和に近づく為に其方向に進歩せざる可らず
⑼　其調和の方法如何。其進歩の方向如何。未来の調和を得ん為に一時の不調和を来すことあるべきか。之を犠牲に供すべきか
⑽　此方法を称して開化と云ひ其方向を名づけて進化と云ふ
⑾　文芸とは如何なる者ぞ
　文芸の基源
　文芸の発達及其法則
　文芸と時代との関係 etc.

(11)〔原〕 文芸は開化に如何なる関係あるか進化に如何なる関係あるか

(12) 若〔も〕し此方法と方向に牴触せば全く文芸を廃すべし

(13) 若〔もし〕文芸の一部分が此に無関係にて一部分が有益に一部分が有害ならば第三を除〔芟除〕すべし

(14) 文芸の開化を裨益すべき程度範囲

(15) 日本目下の状況に於て日本の進路を助くべき文芸は如何なる者ならざる可らざるか。v. 西洋

(16) 文芸家の資格及其決心[11]

こうした構想の下に様々な文献を読み込んで作成された夥しいノート（いわゆる「文学論ノート」）は東北大学附属図書館漱石文庫に保存されており、いまなお研究者の関心を惹いてやまない[12]。だが、帰朝後の講師夏目金之助の講義が思うに任せず、切り詰められていったことは「文学論序」（『読売新聞』1906・11・4）から知られる通りである。漱石はいう。

> 但十年の計画を二年につゞめたる為め（名は二年なるも出版の際に費やしたる時間を除いて実際に使用せるは二夏なり）又純文学学生の所期に応ぜんとして、本来の組織を変じたる為め、今に至つて未成品にして、又未完品なるを免がれず。

とすると本稿で取りあげた「序論」は、留学中の構想と、生業としての講義との、ちょうど接合部にある。『英文学形式論』を読むだけでは掴みにくかった、留学中の構想と帰国後の講義との関係は、外国語文学を非ネイティヴとして研究することを文明論的な視座で捉える序論を読むことでより鮮明に捉えることができる。

最後に、序論の内容が初期漱石の創作に共鳴していることを指摘しておきたい。1906年10月23日の狩野亨吉宛書簡で漱石は「僕は世の中を一大修羅場と心得てゐる。（略）敵といふのは僕の主義僕の主張、僕の趣味から見て世の為めにならんものを云ふのである。（略）僕は打死をする覚悟である。（略）どの位人が自分の感化をうけて、どの位自分が社会的分子となつて未来の青年の肉や血となつて生存し得るかをためして見たい」と述べ、小説『野分』（『ホトヽギス』1907年１月）では文学者にして元教師（中学校の英語教師など）、白井道也による「現代の青年に告ぐ」という演説を描いている。その演説中にこんな一節がある。

> 「英国風を鼓吹して憚からぬものがある。気の毒な事である。己れに理想のないのを明かに暴露して居る。日本の青年は滔々として堕落するにも拘はらず、未だ此所迄は堕落せんと思ふ。凡ての理想は自己の魂である。うちより出ねばならぬ。奴隷の頭脳に雄大な理想の宿りやうがない。西洋の理想に圧倒せられて眼がくらむ日本人はある程度に於ては奴隷である。奴隷を以て甘んずるのみならず、争つて奴隷たらんとするものに何等の理想が脳裏に醱酵し得る道理があらう」
>
> 「諸君。理想は諸君の内部から湧き出なければならぬ。諸君の学問見識が諸君の血

となり肉となり遙(ママ)に〔→遂に〕諸君の魂となつた時に諸君の理想は出来上るのである。付焼刃は何にもならない」

（『野分』、11章）

この演説では、狭義には外国文学研究の心構えを述べていた「序論」の論旨（盲目的＝奴隷的模倣から内心の独創性へ）が、狩野宛書翰や『二百十日』（『中央公論』1906年10月１日）などに見られる個人主義的思想に基づく社会変革への意志に接続し、生き生きとした表現を獲得している。漱石の学問と思想の新生面を開く作品として『野分』を読むにあたって、「文学論」講義の「序論」は欠かせない参照点になるのである。

２．資料影印および翻刻

翻刻に際し、筆記訂正痕がある箇所は訂正結果のみ翻刻した。原資料にはノドの綴じ込み・裁ち落としにより読めない箇所があり、文脈からの推測で補った。また綴り・文法の誤りは適宜訂正した。いずれも翻刻者による補訂は［　］で括ってある。なお、（p. 3）の “fair” と “good”、（p. 4）の “Haiku” と “like” の下線は本文と同じ黒インク筆記であり、それ以外の下線とサイドライン、（p. 6）欄外の “NB” は赤鉛筆筆記、それ以外の欄外筆記と（p. 7）のルビ「妥当ナル」は黒鉛筆筆記である。

（p. 1）

On General Conception of Literature

by Prof. Natsumé(13)

On the Dif[tv] of the Study of a

Foreign Language.

（An Introductory Remark.）

It need scarcely be mentioned that a Foreign lit[re] —— with its dif[nt] history of growth & development, with its diff[nt] religion, manners, peculiar code of morals & etiquette, & with its own mythology & traditions, —— is extremely diff[lt] to make a study of. There is nothing in common in the lit[re] of a nation with that of another, except what is natural & universal to humanity; while our task which is of primary significance in literary estimate seems to be most arbitrary & to a great

extent national, if not local or individual[l.]
And it is a matter of course that we can not
appreciate the lit^re^ of a nation, with whom

(p. 2)
we have little in common, but as a foreigner.
It has long been experienced & often
observed that our estimate of a foreign lit^re^
or of a literary man almost entirely depends
upon the critics whom we have the opportunity
of consulting with. An original view of a
literary man or his work, founded upon the
test of the original work or the direct ac-
quaintance with the author will not be easy
to establish, & almost impossible to expect
any welcome. On the contrary, our notion
or idea of a foreign lit^re^ quite independent
of its native critics, will, if expressed, only
tend to betray our ignorance. This
sad fact must be a fact as long as our
confidence or conviction is not firm enough
to insist upon our own original idea or
conception of a literary production. And
this conviction is to be attained only when
we have mastered the language & have
surmounted the barrier of different civilization.
For the meanwhile[→meantime], it is our common lot
to struggle hard in breaking down these

(p. 3)
destructions & over-coming the dif^ties^ of several
centuries' standing. And we must be contente[d]
with our vague & arbitrary notions of a lit^re^
flourishing on that side of the frontiers, as
investigated through the effort of a few literar[y]

spies, or informed by various reporters.

I now stand before you students of Eng. lit^{re}, as a 'fair representative' of Japanese scholars of English lit^{re}, with all the dif^{ties} in common with the average of them. I said fair, not good, for I mean that I represent them not as a gifted few or one or two exceptional person with special privileges & opportunities to plunge to the depth of the heart of the nation whose lit^{re} we are now studying. So it is as a fellow — struggler in the transition waves of our national progress, that stand as a representative; & nothing is farther from me than to claim to be perfectly anglicized in our intellect & feelings. It is impossible to shake off the dead weight of all the past upon us; the might[y] undula[tion]

(p. 4)

of the rapid and abnormal Europeanization has borne us into the sea of a new civilization only so far as to lose sight of a few old familiar objects upon the shore, but not to be stranded fairly on the opposite shore. Another couple of generations must fully elapse before any one of us should come to understand the nation in question, so that he might have a clear and just idea of its lit^{re}. For it is no easy task to crush the fetters of traditions & to break the chains of national prejudice till we can fairly stand upon the same plain with a nation of entirely dif^{ent} culture.

So the idea of doing without a foreign prof.
in a literary college, like our own, is simply
absurd at the present condition of things.
It is hardly possible even with the self-confident
German nation. Literature is so much of the
heart as of the intellect; & we must wait
for the independence of foreign literature
study much longer than for the independence

(p. 5)

of sciences or other branches of study. Nothing
is more absurd than to try to unlock the
treasury of a foreign lit^re^, with its precio[us]
gold & jewels garnered for ages, without a
key handed down from the ancestors of the
nation only to their children. A glimpse
of these treasures from outside will dazzle us
but [give us only a] partial idea of their worth. This is exact[ly]
the case with our national lit^re^. An attemp[t]
to make an infallible estimate of the gems
of our Haiku or to produce of these precio[us]
things by one who do[es] not know the history
of the art & without the taste peculiar to
it will be no less ridiculous.

It is next to impossible, therefore,
to try to criticize Eng. lit^re^, like an Englishma[n]
as a Japanese. Still it is interesting to make
our own view of a lit^re^, cultivated on a
different soil under the different phase of the
light of civilization, and to find out what is
best to be introduced to our own country & se[e]
if they grow well on the soil of our culture.
The interest of the thing surely reward the effo[rt]

(p. 6)

& the absolute difficulty of the attempt must be suffered with a good hope for the things to come.

NB

日本文学—現状

With regard to the introduction of foreign ideas in general, or of a foreign lit[re], we must own that our predecessors, as much as our contemporaries, have lacked the discrim[in]ation necessary to render the service which they presume to do to their country. When first our pioneer scholars of foreign languages had introduced their lit[re], classic authors were admired everywhere just as they were then on the pages of out-of-fashioned critics. But soon they gave place for romantic writers; & then came Tolstoïs & Ibsens in a rapid succession, soon to be supplanted by Nietzsches & Golkies[→Gorkies] & a train of abnormal thinkers & writers. Neither can they be long spoiled with undeserved praise and fanatic admiration. Such a rage of novel introduction is not natural; & a forced introduction would of necessity drive the poor guests thus unexpectedly welcomed long before they ought to have been neglected or forgotten.

将来

(p. 7)

Introduction of a new theory or of a new movement without the accompaniment of a natural & commendable growth of taste necessarily ends in hasty imitation & unfair appreciation and, what is worse in throwing it off, never to take it up again for its true merits. All the short lived fame of the past authors hastily recommended, and the premature death of a new movement introduced by

新来作家敢ナク理

由拒ノケラルヽ force are the result of servile imitation,
entirely disregarding the important fact
that the originality in the heart is the best
end to the most available imitation. An[d]
our conviction in our own view of a
foreign lit[re] has suffered not a little
from this servile imitation & the lack
of the exercise on the part of originality.
Let us, students of Eng. lit[re], stand and
fight against the evil fashion of the day
to welcome every new comer for its novelty.
It may not be successful at present, but
it is necessary for the development
of the required firm conviction in our

(p. 8)
study of foreign merits as well as our own
excellences.

Now I think that there is something
in our study of English lit[re] and that I
mean something in my bold attempt at
an otherwise nonsensical study and
lecturing on it.

妥当ナル

(p. 1)

On General Conception of Literature

by Prof. Natsumé.

On the Difty of the Study of a Foreign Language.

(An Introductory Remark.)

It need scarcely be mentioned that a foreign litre —— with its diffnt history of growth & developement, with its diffnt religion, manners, peculiar code of morals & etiquette, & with its own mythology & traditions, —— is extremely difflt to make a study of. There is nothing in common in the litre of a nation with that of another, except what is natural & universal to humanity; while our task which is of primary significance in literary estimate seems to be most arbitrary & to a great extent rational, if not local or individual. And it is a matter of course that we can not appreciate the litre of a nation, with whom

we have little in common, but as a foreigner.

It has long been experienced & often observed that our estimate of a foreign litre or of a literary man almost entirely depends upon the critics whom we have the opportunity of consulting with. An original view of a literary man or his work, founded upon the test of the original work or the direct acquaintance with the author will not be easy to establish, & almost impossible to expect any welcome. On the contrary, our notion or idea of a foreign litre quite independent of its native critics, will, if expressed, only tend to betray our ignorance. That this sad fact must be a fact as long as our confidence or conviction is not firm enough to insist upon our own original idea or conception of a literary production. And this conviction is to be attained only when we have mastered the language & have surmounted the barrier of different civilizatio For the meanwhile, it is our common lot to struggle hard in breaking down these

destructions & over-coming the difties of several centuries' standing. And we must be contente with our vague & arbitrary notions of a litre flourishing on that side of the frontiers, as investigated through the effort of a few literary spies, or informed by various reporters.

I now stand before you students of Eng. litre, as a 'fair representative' of Japanese scholars of English litre, with all the difties in common with the average of them. I said fair, not good, for I mean that I represent them not as a gifted few or one or two exceptional person with special priviledges & opportunities to plunge to the depth of the heart of the nation whose litre we are now studying. So it is as a fellow-struggler in the transition wave of our national progress, that stand as a representative; & nothing is farther from me than to claim to be perfectly anglicized in our intellect & feeling. It is impossible to shake off the dead weight of all the past upon us; the might undulat

of the rapid and abnormal Europeanization has borne us into the sea of a new civilization only so far as to lose sight of a few old familiar objects upon the shore, but not to be stranded fairly on the opposite shore. Another couple of generations must fully elapse before any one of us should come to understand the nation in question, so that he might have a clear and just idea of its life. For it is no easy task to crush the fetters of tradition & to break the chains of national prejudice till we can fairly stand upon the same plain with a nation of entirely different culture.

So the idea of doing without a foreign prof in a literary college, like our own, is simply absurd at the present condition of things. It is hardly possible even with the self-confident German nation. Literature is so much of the heart as of the intellect; & we must wait for the independence of foreign literature study much longer than for the independence

of sciences or other branches of study. Nothing is more absurd than to try to unlock the treasury of a foreign litre, with its precio gold & jewels garnered for ages, without a key handed down from the ancestors of the nation only to their children. A glimpse of those treasures from outside will dazzle us but partial idea of their worth. This is exact the case with our national litre. An attemp to make an infallible estimate of the gems of our Haiku or to produce of these precio things by one who do not know the history of the art & without the taste peculiar to it will be no less ridiculous.

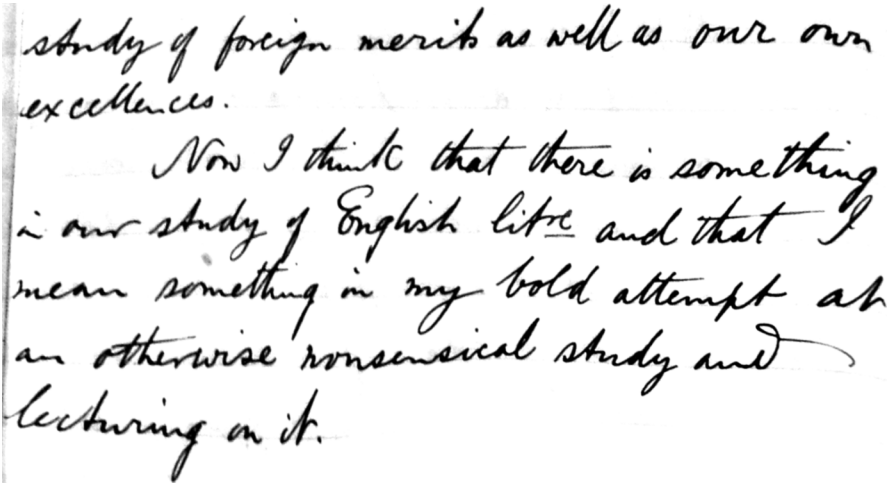
It is next to impossible, therefore to try to criticise Eng. litre, like an Englishm as a Japanese. Still it is interesting to mat our own view of a litre, cultivated on a different soil under the different phase of the light of civilization, and to find out what best to be introduced to our own country & see if they grow well on the soil of our culture. The interest of the thing surely reward the effo

& the absolute difficulty of the attempt must be suffered with a good hope for the things to come.

With regard to the introduction of foreign ideas in general, or of a foreign litre, we must own that our predecessors, as much as our contemporaries, have lacked the discrimination necessary to render the service which they presume to do to their country. When first our pioneer scholars of foreign languages had introduced their litre, classic authors were admired everywhere just as they were then on the pages of out-of-fashioned critics. But soon they gave place for romantic writers; & then came Tolstoi's & Ibsen in a rapid succession, soon to be supplanted by Nietzsches & Golkies & a train of abnormal thinkers & writers. Neither can they be long spoiled with undeserved praise and fanatic admiration. Such a rage of novel introduction is not natural; & a forced introduction would of necessity drive the poor guests thus unexpectedly welcomed long before they ought to have been neglected or forgotten

Introduction of a new theory or of a new movement without the accompaniment of a natural & commendable growth of taste necessarily ends in hasty imitation & unfair appreciation and, what is worse in throwing it off, never to take it up again for its true merits. All the short lived fame of the past authors hastily recommended, and the premature death of a new movement introduced by force are the result of servile imitation, entirely disregarding the important fact that the originality in the heart is the best and to the most available imitation. Thus our conviction in our own view of a foreign litre has suffered not a little from this servile imitation & the lack of the exercise on the part of originality. Let us, students of Eng. litre, stand and fight against the evil fashion of the day to welcome every new comer for its novelty. It may not be successful at present, but it is necessary for the present development of the required firm conviction in our

（p. 8）


study of foreign merits as well as our own excellences.

Now I think that there is something in our study of English litre and that I mean something in my bold attempt at an otherwise nonsensical study and lecturing on it.

3．資料翻訳

訳文中、原文の赤鉛筆下線部は下線で、黒インク下線部はカギ括弧や傍点で強調を行い、サイドラインのかかる部分は太字で示した。

（p. 1）
文学論
夏目教授
外国語研究の困難について
（序論）

ほとんど言うまでもないが、外国文学は――異なる成長や発展の歴史、異なる信仰、様式、固有の道徳律や作法、そして独自の神話と伝統を持っており――研究を行うのが極めて難しい。人間にとって自然で普遍なものを除けば、ある国の文学と他国の文学に共通するものなど一切なく、他方で文学的価値判断をするために何より重要な我々〔文学研究者〕の営みもまた、地域や個人特有とは言わないまでも、かなり恣意的で多分に自国と結びついたもののように思われる。そして当然ながら、ほとんど共通点を持たない国の文学は、外国人としてしか理解することはできない。

（p. 2）　長らく知られ、よく目にされてきたように、外国文学や文学者に対する我々の価値判断というのは、完全にと言えるほど、意見を聞く機会を持つ批評家に左右され

る。原書を検討するか、著者と直接会うかして、ある文学者やその作品に対する独自の見解を打ちたてるというのは簡単ではないうえ、いかなる歓迎もほとんど期待できないだろう。歓迎どころか、外国文学に対する我々の考えやアイデアは、当該地の批評家たちのものとは完全に別個のものであるため、もし口にすれば、己の無知をさらけ出すことになるだけであろう。この悲しい事実は、我々が十分な自信や確信を持って、ある文学作品に対する自らのアイデアや考察（コンセプション）を語らない限り事実であり続ける。そしてその確信は、対象国の言語を習得し、文明の違いという障壁を乗り越えたときにのみ手にすることができる。当面のあいだ、我々はみなその壁を壊し数世紀も続く困難を乗り越えようと苦闘する運命にあるだろう。

（p. 3）　そして我々は国境の向こう側で栄える文学について、少数の文学的スパイが尽力した調査や、種々の報告者たちによる情報に基づく曖昧で恣意的な認識に甘んじるほかない。

私は、あなたがた英文科の学生たちの前に、英文学を研究する日本人学者一般とあらゆる困難を共有する「公正な代表者」として立っている。「公正な」と言い、「良き」と言わなかったのは、私が一握りの天才としてだとか、現在研究している文学を生み出した国の核心まで奥深く身を浸す特権や機会を得た一人か二人の例外的な人間として日本人英文学者を代表しているわけではないからだ。みなさんの前に立っているのは仲間として――我が国の発展という変化の波にもがく者のひとりとしてであって、我らが知性と感性を完全に英国化せんとの主張ほど私から縁遠いものはない。過去という重荷をきっぱりと振り払うことは不可能であり、（p. 4）急速かつ尋常ならざる西洋化という凄まじいうねりは我々を新しい文明という海へ運んできたが、こちら岸の古く馴染みある物事をいくつか見失ってしまうばかりで、無事に向こう岸へと着くには至っていない。あと二～三世代まるまる過ぎれば、対象の国を理解し、その国の文学について明晰で公正な見解を持つ者が現れるだろう。伝統という足かせを破壊し、国民的偏見という鎖を断つのは簡単な仕事ではないのである、まったく異なる文化の国と同じ地平に並んで立つまでは。

したがって我々のような文科大学で、外国人教師なしで済ませようという考えは、物事の現状からすればまったく馬鹿げている。自信に満ちたドイツ国民であってもほとんど不可能だろう。**文学は知性のものであると同じ程度に心のものでもあるから、科学やその他の研究分野の自立よりも外国文学研究の自立には遙かに長く時間がかかる。（p. 5）そして何より馬鹿げているのは、長きにわたり蓄積された貴重な黄金や宝石の詰まった外国文学という宝箱を、当該地の先祖が彼らの子孫にだけ手渡してきた鍵を持たずに開こうとすることだ。**それらの宝は外から垣間見ると魅入ってしまうが、それは宝の真の価値の一部分にすぎない。これはまさに我が国の文学にも当てはまる。我が国の「俳句」の歴史をまったく知らず、それ固有の趣味（テイスト）を持ち合わせない者が、俳句とい

う宝石の絶対的な評価を作ろうと試みたり、そうした素晴らしい俳句を生み出そうと試みたりするのはまさしく馬鹿げたことだ。

それゆえに、日本人が英国人と同じように英文学の批評を試みるのは不可能に近い。**されど、異なる土壌で異なる段階の文明の光を浴びて育った文学に対して自身独自の見解を築き、自国へ紹介するには何が最適かを考え、自国の文化の土壌でよく育つかどうかを検討することにはなおも心くすぐられる。異なる土壌に育った文学に対する独自の見解を養おうとすること[14]は確かに努力に値するものであり、**（p. 6）その試みの大いなる困難は、きたるべき世界への大いなる希望とともに耐えなければならない。

外来思想や外国文学の紹介については、**現代人と同じように先人たちも、国のためになると思っていた仕事を全うするのに必要な識別能力を欠いていたと認めざるを得ない。**我が国の先駆的な外国語研究者たちが最初に対象国の文学を紹介したとき、いたるところで古典作家たちが賞賛されたのは、ひとえに当時そうした作家たちが時流に取り残された批評家の書き物に採り上げられていたからだった。しかし程なく、そうした作家たちはロマン主義作家たちにとって代わられ、それから矢継ぎ早にトルストイやイプセンのような作家たちが登場し、すぐさまニーチェやゴーリキーのような作家たち、そして一連の特異な思想家・作家にとって代わられた。しかし彼らも過剰な賞賛や熱狂的関心でいつまでももてはやされはしない。このように新しいものを次から次へと紹介するのは自然なことではなく、無理やり紹介を行ってしまうと、とっくの昔に無視され忘れ去られてしかるべきだった不毛な客をかくも思いがけず歓迎することになる。（p. 7）自然かつ見事に趣味（テイスト）を成長させることなしに新しい理論や運動を紹介しても、性急な模倣や偏った理解に陥るだけであり、さらに良くないことに、紹介されたものをすぐにかなぐり捨ててしまって、真価を検討するために二度と取り上げることがない。慌ただしく紹介された過去の作家たちの短命に終わった名声や、むやみやたらに紹介された新しい運動の早すぎる終息は、おしなべて盲目的な模倣の結果であって、自身の内に独創性（オリジナリティ）を持つことが最も妥当なる模倣の至上目的であるという大切な事実を完全に見落としてしまっている。外国文学に対する独自の見解への我々の確信というものは、この種の盲目的な模倣をしたり、あるいは独創性を発揮することができず、大いに苦しんできた。さあ、英文科の学生諸君、目新しさゆえにあらゆる新参者を歓迎する現代の悪しき傾向に立ち向かおう。その試みは目下のところ成功していないかもしれないが、それは我々自身の美徳だけでなく外国の美質を研究するのに求められる強固な確信を育むのに欠かせない。

（p. 8）　そういうわけで、我々の英文学研究、つまりともすれば無意味な研究を行い、それについて講義するという私の思いきった企てにも、いくらかの意義があるのではないかと思っている。

（1） 服部徹也「帝大生と『文学論』――漱石『文学論』講義の受講ノート群をめぐって――」（『近代文学合同研究会論集』第12号、近代文学合同研究会、2015・12）。森巻吉についての記述が一部重複することをお断りする。

（2） 金子三郎編『川渡り餅やい餅やい　金子健二日記抄』（私家版［国会図書館所蔵］、1998）上巻（以下『金子日記抄』と略称）、p. 173。

（3） 東海良興『森巻耳と支援者たち　岐阜訓盲院創立のころ』（岐阜県立岐阜盲学校創立120周年記念事業実行委員会、2010）、pp. 159-176参照。その他、本稿の森の略歴は同書に拠る。

（4） 森巻耳は英会話にも秀でていたという。今井一良「英学二代　森巻耳（岐阜訓盲院長）とその子巻吉（旧制一高校長）のこと」（『北陸英学史研究』第7輯、日本英学史学会北陸支部、1995・10）は巻耳、巻吉の生涯を概観するのに有益。

（5） 岡本拓司「第一高等学校校長　森巻吉の生涯―やりゃあやれるんだ」（東京大学教養学部編『高校生のための東大授業ライブ　熱血編』東京大学出版会、2010）。

（6） 以下、授業の日程については断りのないかぎり『金子日記抄』（前掲）による。なお並行して開講していた『サイラス・マーナー』やシェイクスピア戯曲の作品講読の授業については、煩瑣を避けて挙げない。

（7） 終了日については金子三郎編『記録　東京帝大一学生の聴講ノート』（リーブ企画、2002）、p. 478により推定。

（8） 終了日については金子健二『人間漱石』（いちろ社、1948）pp. 102-103により推定。

（9） 他の教員、たとえばラフカディオ・ハーンの帝大講義にも序論の存在が確認できる。野間真綱筆記による受講ノート『HISTORY OF ENGLISH LITERATURE』（県立神奈川近代文学館蔵）の冒頭には「History of English literature 1st period Introductory remark」がある。

（10） 服部徹也「『英文学形式論』講義にみる漱石の文学理論構想――「未成市街の廃墟」から消された一区画――」（『國語と國文學』94巻10号、東京大学国語国文学会、2017・10）では「序論」が漱石の発言に基づくことと論証するとともに、「序論」や受講ノートを含めて「形式論」講義の再解釈を試みた。なお授業初日に「序論」より先に話した内容がわかる講義草稿の写真が『漱石全集』「月報第九号」（岩波書店、1928）に掲載されている（現物は散逸）。

（11） 『漱石全集』（21巻、岩波書店、1997）、pp. 701-702。カタカナ文をひらがな文に改めた。

（12） 伊藤節子「初期漱石における「科学」の様相――「文学論ノート」をめぐって――」（『三田國文』57号、三田國文の会、2013）、柴田勝二「見出される「東洋」――ロンドンでの苦闘と『文学論ノート』――」（『夏目漱石　「われ」の行方』世界思想社、2015）、佐々木英昭「夏目漱石『ノート』の洞察――開化ハ suggestion ナリ――」（『比較文学』59号、日本比較文学会、2016）等を参照。

（13） 夏目金之助は正しくは「講師」であった。

（14） 訳注：この箇所の原文「The interest of the thing」は、文脈を踏まえ「The interest of cultivating a view of a literature originally cultivated on a different soil」という主旨であると判断し、そのように訳出した。

（はっとり　てつや）
（ひぐち　たけし）